広島大学学術情報リポジトリ
Hiroshima University Institutional Repository

Title	内村鑑三の教会観 ： 日本独自の無教会
Author(s)	アンドレアス H. ルスターホルツ,
Citation	日本語・日本文化研修プログラム研修レポート集 , 1989 : 143 - 146
Issue Date	1990-03-15
DOI	
Self DOI	
URL	https://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/00039274
Right	
Relation	

内村鑑三の教会観

―― 日本独自の無教会 ――

アンドレアス H. ルスターホルツ

はじめに

旧教会（カトリック教）をはじめ、キリスト教のあらゆる教派が日本にもある。ところが、それらの内の一派は外国から入って来たものではなくて、日本人を祖とした日本独自の教派である。この教会はその体質上、厳格な組織を否定することから、無（形）教会という。現在、日本のほかに、韓国と台湾にも無教会（主義）に属する少数の人がいる。日本でも無教会に属する人は少ない。毎週日曜日の朝、信者が集まって礼拝[1]を行う。人数は場所によって違う。例えば、関東や関西地方ではそれぞれ100人もの集会はいくつかあるのに、広島の「聖書研究会」の場合は4人ぐらいしか集まらない。集会に集まる者は皆宗教的に同じ地位にある。なぜかというと、誰も牧師か神父か司祭かの資格を持たず、平信徒であるからだ。万人祭司主義の意味でも地位は同じだから、当番の人は、その日曜の礼拝の担当者になって、自分の聖書の読書や研究などに基づいて話をする。

この論文では、無教会の思想を発想した内村鑑三の教会観を考えたいと思う。つまり、キリスト教の日本独特の教派である無教会の思想と、旧教会や新教会などの思想（教理や教義）とは、どの点が異なるのか。内村鑑三自身は、「聖書之研究」[2]（以下「聖研」と略称）という自分が発行した雑誌で次のように述べた。

> 「はじめにユダヤ教あり、次ぎにローマ教会あり、次ぎに新教会あり、終りに無教会あり。無教会は新教会のさらに進歩したるものなり。キリスト教はついにすべての外形を脱却すべきものなり。しかして今や世界各国において無形教会は起りつつあり。われらこの末日にせに遣わされし者はルーテル、カルビン、ウェスレー等の創設にかかる新教会いずれの教派にも属する要なきなり。」（聖研 1906年5月号）[3]

1　内村鑑三の青春期

先ず内村鑑三の青春期を述べ、そして青春期の経験を通して内村の考え方の発展と教会観を調べたいと思う。

1861年（万延2年2月13日）3月23日、江戸小石川の西崎武士長屋に生まれた。幼時を高崎で過し、その後東京の有馬私学校、東京外国語学校で英語の勉強をし、1877年札幌農学校[4]に入学した。内村の父は、孔子学者であって、あらゆる種類の神々にむかって決定的に漢神的であった。幼い時に受けた教育を通して、彼は自然に儒教の封建領主に対する忠義と、親と師に対する誠実と尊敬との観念を身につけた。少年時代に芽生えた彼の「宗教的感受性」は父や母によってもたらさ

れたものではない。宗教的な態度は，内村自身がこう説明したのである。

「しかし余の過ぎし日のいかなる回顧も，はなはだしい迷信に丹念に支えられて余がその下を手探りしていた精神的暗黒より以上の大きな屈辱を余のうちにひき起すものはない。」[5]

「甚しい迷信」と「精神的暗黒」と厳しい判断を下すのは何故だろうか。内村は彼が信じた神々の戒律を必ず守ろうとした。毎朝，四つの方位にいる神に祈禱を捧げたのも当然だった。神々の戒めの数は段々増加して，使用禁止の物も増えてきた。それぞれの神の意志を満たすことと，戒律を守ることとは次第に不可能になって，神に対する虞は，心のたいへんな負担になってしまい，解放に憧れるようになった。初めてキリスト教と接した切っ掛けは，ある級友に誘われて，英国のキリスト教教会に行ったことだった。最初の礼拝聴講以来よく行ったのであるが，真理を捜すというより，歌をうたう婦人と牧師の従教の見物が目的だった。札幌農学校入学後，上級生（当時全校に2級しかなかった）の全員は，すでにキリスト教に回心していたので，新入生にも回心を促したのである。しかし，それに抵抗した者も2－3人あり，彼らは異教徒としていじめられた。その中に内村（当時16歳）もいたが，同年10月1日に，とうとう学校の世論に対抗できなくなり，『イエスを信ずる者』の契約に署名させられてしまった。契約に署名をするのを強制された時は，それは彼の本意ではなかったにもかかわらず，新しい信仰の実際的な利益はただちに明らかになった。以前信じていた神々の数は800万以上だったが，宇宙に一つの神しかないことがわかった。それに従って，すべての神々の戒律はなくなって，神社を通り過ぎる時も，祈りをせずに平気に通りぬけられるようになったのである。新しい信仰は，唯一神教であって，今まで経験したことのない宗教上の自由を与えられた。翌78年6月2日，内村は同級生と一緒に，メソジスト派のアメリカ人宣教師[7]の説教を聞きに行き，午後別の説教と祈禱の後，彼より洗礼[8]を受けた。

2　初期教会の構造

私宅で形成された『教会』の日曜日礼拝の構造はこうだった。内村や彼の同級生より一年前に洗礼を受けた5[9]という人は，彼らよりキリスト信徒の経験が長いので，彼を除って，指道者の資格をもつ人は誰もいなかった。そのため，同じ宗教的な態度の同級生による日曜の宗教的な集会も，全く民主的であった。集会の指導権は順番によって会員にそれぞれまわってくる。順番に当った人はその日曜日に彼らの牧師になり，礼拝を開き，祈禱し，聖書を朗読するほか，自分自身の短い話をした。そして生徒の一人ずつを呼びだしてひとりひとりに話をさせた。礼拝以外，水曜日に祈禱会も行われた。指導者がいないため，聖書の理解はあんより先入観のない日本人の理解でした。もちろん，英文のアメリカ・トラクト協会の『Illustrated Christian Weekly』とほかのキリスト教の刊行物も入手していた。書物を通して間接的な教えはあったけれども，外国の宣教師の説教を聞く機会は少なかった。この初期教会の構造はだいたい今日まで残っている。

上のクラスが卒業する時（1880年7月），3年生の内村と同級生と4年生達は，近い将来に礼拝堂を建築する計画を立てた。今の3年生は卒業した後，彼らに加わるつもりだった。しかし一つの問題があった。3年生はメソジスト教の牧師より洗礼を受けており，一方4年生は聖公会に属していた。というのは一箇所に二つの教会が競合するようになったからだ。『主一つ，信仰一つ，バプテスマ一つ』と彼らは考えたのである。内村は日記でこう書いた。

「一つでさえ自分の足で立つだけ強くないのに，二つの別々の基督教団体をもつ必要が何処にあるか。我々は我々の基督信徒の経験においてはじめて教派主義の害を感じた」[10]

卒業する時，アメリカのメソヂスト監督教会から，「新教会の建築のための金をさし上げる」という一通の手紙が届いた。しかし，外部から自分たちの教会の独立を確保する意志が強かったので，彼らはそれを与えて貰うのではなく，ただそれを一時的に借金するつもりであった。結局，その二つの教会は力を合わせて，高価な建物を建てるかわりに，2階建の建物を賃借し，早い機会にその借金を返済した。それで独立は保った。ところが，教会の独立の実現とともに，内村はそれに別れを告げた。4年後，彼が訪問した時，こう述べた。

「それは本当に，言葉の完全な意味であるところの，全国唯一の教会である。ただに財政的にのみならず，教会制度的に神学的に，彼らは，彼ら自身の責任において，彼らの基督教的事業を続けており，きわめて喜ばしい結果を得ていた。」[11]

3　教会観とその問題

（注）

1　キリスト教では「れいはい」，仏教では「らいはい」という。
2　『聖書之研究』1900年9月創刊。内村は第1号から，毎号その巻頭に，わずか数行の短文数篇を掲げるのを常とした。これらの短文は「所感」とよばれていた。「内村鑑三所感集」という本で発刊された。
3　鈴木俊郎編　1973　p 172
4　北海道開拓使が，1876（明治9）年に新設した札幌農学校（現国立北海道大学の前身）。
5　内村鑑三　1938　p. 6
6　自分の言葉で「一年はしゃくに気むずかしい物おじりする子供であった」内村　1938　p. 18
7　Merriman Colbert Harris（1848 − 1921）メソヂスト監督教会
8　キリスト教で信者となるための儀式。水にでたし，あるいは頭上に水をそそぐ。
9　S 第2期生佐久間信恭（1861 − 1923）のち，英語学者
10　内村　1938　p 56
11　〃　p 51
12　Independence is the conscious realization of one's own capabilities

文献

a　鈴木俊郎編　内村鑑三所感集　岩波書店　1973

b　内村鑑三著　鈴木俊郎訳　余は如何にして基督信徒となりし乎　岩波書店　1938

c　The Complete Works of Kanzō Uchimura, With Notes and Comments by Tarjira Yanaoch, Yoichi Muto　Vol. I　How I Became a Christian, And of my Diary　Kyo Bun Kwan　1971

d　量　義治　無教会の論理　北樹出版　1988

e　島崎暉久　ドイツ体験レポート　真文舎　1988